

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	横浜市立太尾小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	「オーナーシップを子どもに」に基づく学びの創造

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 活動に至る経過

本校の子どもは学力は平均以上で家庭教育も良好だが、自己肯定感の低さが課題である。そのため「学びのオーナーシップを子どもに」をキーワードに学校づくりを進めている。自ら問いを持ち、答えを探究することを重視している。問いの醸成には対話が不可欠であり、対話を核にした活動を進める。その基盤となる教師の対話力向上も併せて培い、ともに未来をひらく子どもの育成を目指す。

2 活動・研究の目的

子どもの学びに対するオーナーシップを育成することを目的とする。そのために、子どもについては特別活動を柱に子ども主体の学びの創造を行う。併せて、教員の対話力とファシリテーション力を従前の職員会議から「対話」の時間とすることで培い、子どもの学びの伴走者としての力を育むようにする。

3 活動内容

(1) 子どもが決める活動の充実

- ① 校内共同研では特別活動を重点とし、「子どもが主体的に取り組む学級活動の在り方～自分で考え、話し合い、決めて、実践する子どもをめざして～」を研究主題に子どもが学級会での対話を通して合意形成をする力が育まれた。さらに、自分たちの活動を自分たちで決めること、日々の生活の中でともに豊かに生きるために何が課題なのかを見つける目と心が醸成している。



- ② 学校行事においては教師がつくるから子どもたちがデザインするへという流れで進めた。例えば、6年生の修学旅行では、学校からバスで小田原城まで移動し、お弁当を食べてから15時30分の強羅公園集合までの3時間半の行動は子どもたちのグループ行動とした。美術館、大涌谷など学年25グループがバス、電車、ケーブルカーなどの交通手段を選んで、決めて行動をした。従前は日光でのほぼ団体行動だった時では味わえない達成感があった。そこに至るまでの子ども同士、子どもと教師の対話は切実感のあるものとなっていた。



(2) 教師の対話スキルの向上

- ① NPO 法人「学校の話しよう」より専門的・的確なサポートを受け、教師の対話スキルやマインド向上研修を行った。「聴くこと」「問うこと」「振り返ること」が大きな柱になったが、対話のよさ、意義などを教師自身が体感することが、子どもの対話を向上するには欠かせないことを実感した。
- ② 従前月1回実施していた「職員会議」は行わず、その時間を「対話」に当てた。年度始めの2日間「チームビルディング」を行い、互いの教育観、子ども観、目指す教育像などを対話することはチームづくりの原動力となった。教師自身が互いのことをいかに知らなかったかという気づきが重要であった。



4 子どもたちへの効果

(1) 自己肯定感の向上

学級活動の中だけでなく、行事への取組、日々の授業などで今まで以上に対話の活動を多く取り入れたことで子どもは自分の意見が尊重される経験を積み重ねた。これにより、自分の考えを持ち、表現する重要性を理解しするようになった。このことは、自己肯定感の向上に寄与していくと考えられる。

(2) オーナーシップの発達

子どもが自分の学びに対する責任感や主体性を強く意識するようになった。これは、教師が案内人や伴走者として、子どもが自分で問いを立て、解決を導き出すプロセスを支援するという立ち位置で子どもと接したことが大きい。

このような効果があるが、一方、次のような課題も見えてきた。

- 子どもの自律的な学びを促進するための対話重視の環境整備
対話の質と多様性を更新する。例えば、対話をより活性化するために、ディスカッション、グループワーク、ロールプレイなどの対話型学習を取り入れる。そして、対話を通じて、他者への共感や批判的思考を養うようにする。そのために、教師は今まで以上に伴走者となり、子どもたちが互いに敬意をもって対話することを促進することが必要である。
- 教師の対話力向上と職場への定着化



教師自身が対話を楽しみ、職場の基盤とすることで定着化を図ることである。そのためには、教師の対話スキルを磨く必要がある。スキルだけでなく、マインドも更新していくことが課題である。対話をより効果的に進める技術、異なる意見への対処法、多様性を尊重する姿勢などに意識を向ける必要がある。対話についての評価基準もリフレクションの一環として考えることも重要であろう。方法としてはルーブリック作成が考えられるが、これを教師の対話力の指標としてだけで捉えずに、子どもへの転移も含めて常に教師と子どもが同じ立ち位置でともに豊かに生きることを学んでいるという基本姿勢を貫くことが肝要であろう。

これらのことを踏まえ、次年度以降、さらに「対話」を学校経営の中核に据えて、「ともに豊かに生きることを学ぶ学校」づくりを進めていきたい。